

# バックのオーバーラップによる一考察 からのWリベロシステムの戦術分析 (1982年ワールドカップより)

秋 田 浩 一  
田 中 佳 孝

## 序 文

サッカーというスポーツがルール化され、攻撃と守備という形ができて以来、システムは次第に攻撃から守備を重視するシステムに変ってきた。初期のサッカーにおいては、守備と攻撃の役割をはっきりと分化され、攻撃に多くの選手をあて、守備には少ない人数で、ボールを敵陣に蹴り込む役割を行なわせた。

近代サッカーといわれるようになってからは、ハーフバック(H, B)という守備から攻撃者(FW)に配球する役割のポジションができた。年代が進むにつれてシステムはツーバックからスリーバックシステムに進み、失点を少なくする守備を重視した戦術が望まれるようになった。ここではハーフバックつまり中盤での防御が重要になり、フォワードにおいても守備に重点がおかれるようになった。これによって、より失点の減少化が進んだ。

オフサイドルールの改正により、得点向上を目指したのは、FA(The Football Association)である。

アーセナル(イギリスの一部リーグのサッカークラブ)のハーバード、チャップマンは、WMシステムを考案し、その黄金期を築いた。

その後ブラジルが4バックシステムを取り入れ、守備体型と優れた個人技を生かした攻撃をみせてくれた。そして現在では、世界のサッカーは、4バックシステムないしはスイパーシステムをとって守備強化型システムに変ってきた。このシステムからいかに効率の良い攻撃をするかに重点がおかれ、その結果、両サイドバックのオーバーラップが大変有効となり、最近ではスイパー(リベロ)の攻撃参加が攻撃の大きな役割を課す様になった。

## 研究対象

ここでは、1982年に行われたワールドカップサッカースペイン大会でのバックのオーバーラップ

---

※ F・A(The Football Association) 1863年に世界初のサッカー協会がイギリスで創設させた。

からの攻撃を見ることによりバックの攻撃がいかに重要かを考えてみたい。

但しこれは、NHKで放送された試合だけを対象としたものである。

## 考察と結果

個人技術の向上によりひとりの力だけでは、敵の守備を崩すことは難しくなり、特にスーパ－をおいた守備に対しては、ひとりの力で突破することは非常に困難になってきた。これに対抗する為に両サイドバックのオーバーラップ、スーパ－（リベロ）の攻撃参加が必要となってきた。これは敵の攻撃をかわした後BK陣の攻撃により敵のマークのづれを生じさせ少しでもフリーのプレーヤーを作ることにより数的有利を作り2対1の形で攻撃することが理想的である。後方ラインのプレーヤーがトップのプレーヤーの前に出るオーバーラップ、つまり、トップのプレーヤーが少ないために生じた空間を利用しようという作戦である。空間、これがスペースである。このスペースをいかにうまく使うかによって攻撃の幅がでてくるのである。

表1～9はバックがオーバーラップをしてボールがオーバーラップしたバックに渡ってからのプレーである。（オーバーラップが成功したということでその後のプレーを示した表である）

オーバーラップについての次の表1～9は、私的見解が入っていると思うが、「決定的チャンス」は、これは得点だという場面でゴールを割ることができなかった時をいう。たとえば、シュートミス、ゴールキーパーの好守によるものである。「シュート」というのは、それ以外のシ

1次リーグ

表-1

チーム名	スコア	得点	決定的チャンス	シュート <small>(ロング ドリブル)</small>	センターリング パスカット	ドリブルミス トラップミス	計
アルゼンチン	0	0	1	0	3	1	5
ベルギー	1	0	0	1	8	2	11
ブラジル	2	0	0	10	16	2	28
ソビエト	1	0	0	2	1	3	6
西ドイツ	1	0	0	3	4	2	9
オーストリア	0	0	0	1	2	2	5
イングランド	3	1	1	6	5	2	15
フランス	1	0	1	3	5	2	11
スペイン	2	0	0	1	5	0	6
ユーゴスラビア	1	1	1	2	6	0	10
イタリア	1	1	1	0	7	1	10
ペルー	1	1	2	1	5	4	13
計		4	7	30	67	21	129
割合 (%)		3.1%	5.4%	23.2%	51.9%	16.4%	

2次リーグ

表-2

チーム名	スコア	得点	決定的チャンス	シュート (ロング ドリブル)	センターリング パスカット	ドリブルミス トラップミス	計
ポーランド	2	0	1	1	2	1	5
ベルギー	0	0	1	2	3	0	6
ベルギー	0	0	0	1	2	0	3
ソビエト	1	0	0	1	1	0	2
スペイン	0	0	1	0	2	5	8
イングランド	0	0	0	4	11	2	17
西ドイツ	2	0	0	5	5	2	12
スペイン	1	0	0	3	7	1	11
フランス	4	0	1	4	4	2	11
北アイルランド	1	0	0	0	3	2	5
フランス	1	0	1	4	6	1	12
オーストリア	0	0	1	4	3	3	11
北アイルランド	2	1	0	0	2	0	3
オーストリア	2	1	0	0	3	5	9
ブラジル	3	1	1	4	3	2	11
アルゼンチン	1	0	0	7	6	2	15
ブラジル	2	0	2	6	9	7	24
イタリア	3	1	1	1	3	1	7
イタリア	2	0	0	2	1	4	7
アルゼンチン	1	0	1	3	3	6	13
西ドイツ	0	0	0	0	13	1	14
イングランド	0	0	0	1	6	4	11
計		4	11	53	98	51	217
割合 (%)		1.8%	5.1%	24.4%	45.2%	23.5%	

決勝トーナメント

表-3

チーム名	スコア	得点	決定的チャンス	シュート (ロングシュート ドリブルシュート)	センターリングパス カット	ドリブルミス トラップミス	計	
西ドイツ	3 5	0	0	2	2	4	8	} 準決勝
フランス	3 4	0	0	2	1	1	4	
イタリア	2	0	0	3	3	5	11	} 準決勝
ポーランド	0	0	0	2	2	2	6	
ポーランド	3	0	0	2	3	3	8	} 3位決定戦
フランス	2	0	0	2	1	1	4	
イタリア	3	0	2	5	2	6	15	} 決勝戦
西ドイツ	1	0	2	10	6	4	22	
計		0	4	28	20	26	78	
割合(パーセント)		0%	5.1%	35.9%	25.6%	33.3%	—	

ュートを示す。(見方を変えれば多少数字が変わってくることもあると言えよう)

「センターリングカット」、「パスカット」は、決定チャンスにはならなかったが、それに近い形を作ったがボックスにカットないしは、クリアされたものである。

## 考 察

表—1は、一次リーグでの各チームのオーバーラップを示したものである。一次リーグの全試合を見たわけではないので、この表から言えることが、全てとは言いきれない。

二次リーグ出場を考えて守備的なサッカーをするチームが多いなかで、ブラジルは個人技を生かした攻撃を見せてくれた。ソ連との試合でもそうであるが、ボックスのオーバーラップが攻撃の中心であるかのように流動的であった。シュート数を見ても、ボックスの攻撃力がすばらしい。これからのサッカーはますます流動的になり、オールラウンドプレーヤーが必要となってくるであろう。

表—2の二次リーグにおいても、同じようなことが言える。特に守備から攻撃への切り替えの速さ、チャンスと思えばボックスがゴール前まで飛び込んで、シュートを打つ、センターリングをする。特にイタリアの速攻は見事であった。守備から攻撃への速さがすばらしい。

ブラジルは試合によって極端にオーバーラップの数がちがう。これは明らかに意図的に、つまり作戦として、コントロールされているものであろう。このことは西ドイツにもある程度いえることではあるがブラジルほど顕著ではない。西ドイツが組織的に優れている事は、承知の事であり、試合によってボックスの攻撃参加も、ある程度コントロールする事ができる事は、組織力のすばらしさであろう。これは個人の能力、戦術眼、技術がすばらしい事も言える。

チームによっては、オーバーラップをする位置、サイドが同じことが多い。ブラジル、西ドイツは、他のチームに比べて左タッチラインを多く使う。これもチーム作戦のうちの一つと考えることはできるが、個人の能力、技術、相手チームの守備、中盤での弱点やシステムをよく研究したものであろう。

表—3の決勝トーナメントの試合はリーグ戦とはちがい勝負する、つまりゴールを取るという攻撃を多く、守備からすぐ攻撃するというスピードのある攻防が展開された。特にフランス、イタリアの速い攻めボックスの押し上げがすばらしく、ボックスの攻撃力が得点のチャンスを作ることが多くなってきた。

決勝戦では、ボックスのオーバーラップだけでも見るものがあつた。イタリアの速攻と西ドイツの組織だった攻めが見ごたえのある試合であつた。

一次リーグ、二次リーグ、決勝トーナメントの試合全体を見ると、ボックスのオーバーラップでの得点、決定的チャンスを作ることが多いこと、特に一次リーグでは放映された6試合のうち

3試合に得点が入り4得点、これは、サッカーのゲームにおいては他の球技のように得点が多く入ることではないのでいかにオーバーラップがチャンスを作るかがわかる。一次リーグ(6試合)、二次リーグ(11試合)、決勝トーナメント(4試合)でこれだけのオーバーラップが成功し、しかも得点、決定的チャンス、シュートまでいくことが多いことは、前に述べたようにサッカーの試合では簡単に点数をとることはむずかしいので、いかにオーバーラップが攻撃においては重要かがわかる。

(シュートで終わっているオーバーラップ)

一次リーグ	3.1%	+	5.4%	+	23.2%	31.7%
二次リーグ	1.8%	+	5.1%	+	24.4%	31.3%
決勝トーナメント	0%	+	5.1%	+	35.9%	41%

これを見てもわかるように全体の3~4割がシュートで終わっていることがわかる。決勝トーナメントは41%といかに得点を取りにいっているか、勝負に徹しているかがわかる。それに比べると、一次、二次リーグは守備的であったかわかる。しかし30%以上もシュートで終わっていることは、いちがいにも守備的とはいえないのである。

イタリア

チーム名	得点	決定的チャンス	シュート <sup>(ロングシュート)</sup> - <sub>(ドリブルシュート)</sub>	センターリング・パス カット	ドリブルミス トラップミス	計
対 ブラジル	1	1	1	3	1	7
対 ベルギー	1	1	0	7	1	10
対アルゼンチン	0	0	2	1	4	7
対ポーランド	0	0	3	3	5	11
対西ドイツ	0	2	5	2	6	15
計	2	4	11	16	17	50
割合(パーセント)	4.0%	8.0%	22.0%	32.0%	34.0%	—

西ドイツ

表-5

チーム名	得点	決定的チャンス	シュート <sup>(ロングシュート)</sup> - <sub>(ドリブルシュート)</sub>	センターリング・パス カット	ドリブルミス トラップミス	計
対オーストリア	0	0	3	4	2	9
対スペイン	0	0	5	5	2	12
対イングランド	0	0	0	13	1	14
対フランス	0	0	2	2	4	8
対イタリア	0	2	10	6	4	22
計	0	2	20	30	13	65
割合(パーセント)	0%	3.1%	30.8%	46.2%	20.0%	—

## フランス

表-6

チーム名	得点	決定的チャンス	シュート (ロングシュート ドリブルシュート)	センターリング・パス カット	ドリブルミス トラップミス	計
対イングランド	0	1	3	5	2	11
対北アイルランド	0	1	4	4	2	11
対オーストリア	0	1	4	6	1	12
対西ドイツ	0	0	2	1	1	4
対ポーランド	0	0	2	1	1	4
計	0	3	15	17	7	42
割合(パーセント)	0%	7.1%	35.7%	40.5%	16.7%	—

## ブラジル

表-7

	得点	決定的チャンス	シュート (ロングシュート ドリブルシュート)	センターリング・パス カット	ドリブルミス トラップミス	計
対イタリア	0	2	6	9	7	24
対ソビエト	0	0	10	16	2	28
対アルゼンチン	1	1	4	3	2	11
計	1	3	20	28	11	63
割合(パーセント)	1.6%	4.7%	31.7%	44.4%	17.5%	—

## アルゼンチン

表-8

	得点	決定的チャンス	シュート (ロングシュート ドリブルシュート)	センターリング・パス カット	ドリブルミス トラップミス	計
対ベルギー	0	1	0	3	1	5
対ブラジル	0	0	7	6	2	15
対イタリア	0	1	3	3	6	13
計	0	2	10	12	9	33
割合(パーセント)	0%	6.0%	30.3%	36.3%	27.3%	—

国別にボックスのオーバーラップの攻撃をみてみた。優勝したイタリアは、表-4をみてもわかるように守備的なチームであり昔からカテナチオという守備をした時代もあり、速攻がうまいチームである。ボックスも守備から攻撃の切り替えが速く、オーバーラップするタイミングが実に速い。オーバーラップからの得点も2点あり、オーバーラップからの攻撃はすばらしいものがある。

表-7のブラジルは、放映が3試合しかなかったが一番多くオーバーラップしていることがわかる。南米の特色である個人技がオーバーラップにも生かされているし、ボックスの攻撃力だけを見ても、大会でも屈指のものがあるのではないかと思う。38%がシュートで終わっていることを見てもわかる。

図1~9はいろいろなオーバーラップの方法である。

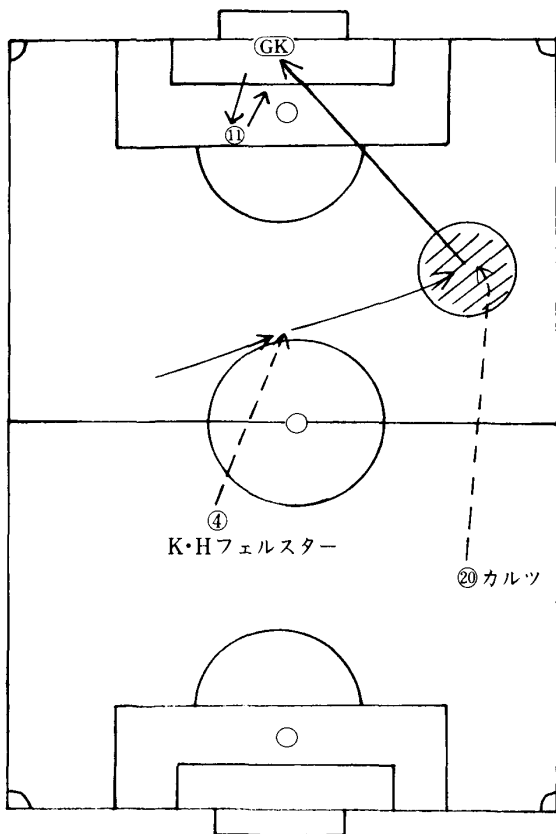


図 1 オープンスペース西ドイツ②⑩カルツ

初めからあるオープンスペースを使ったオーバーラップである。②⑩カルツが長い距離を走りパスを持って攻撃するオーバーラップである。

(西ドイツ対オーストリア)

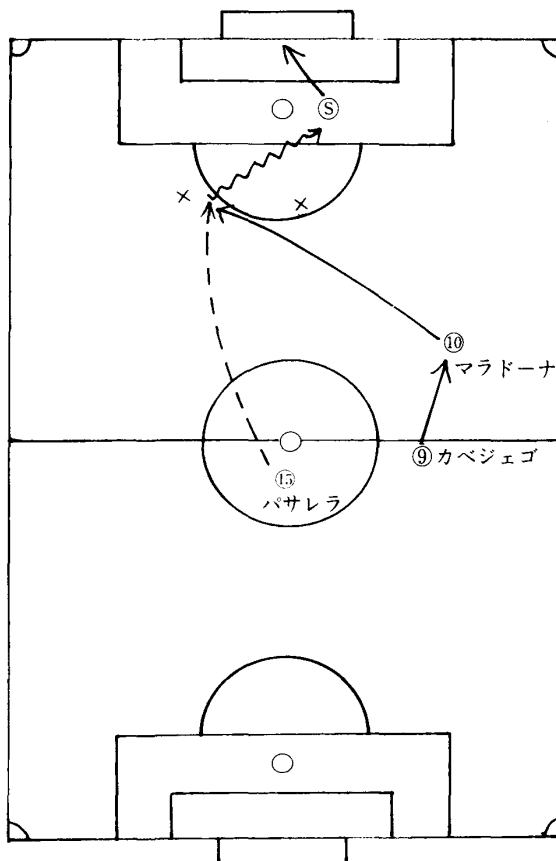


図 2 アルゼンチン⑮ンパサレラ (リベロ)

リベロ (スイーパー) のオーバーラップである。⑮パサレラがゴール前まで走り込んでパスをもらってシュートを打つ。リベロはマークがなくフリーで仕事をするのでパスのつながりに入ったり、ゴール前へ上ってシュートすることが多く決定的なチャンスを作る。

(アルゼンチン対ベルギー)

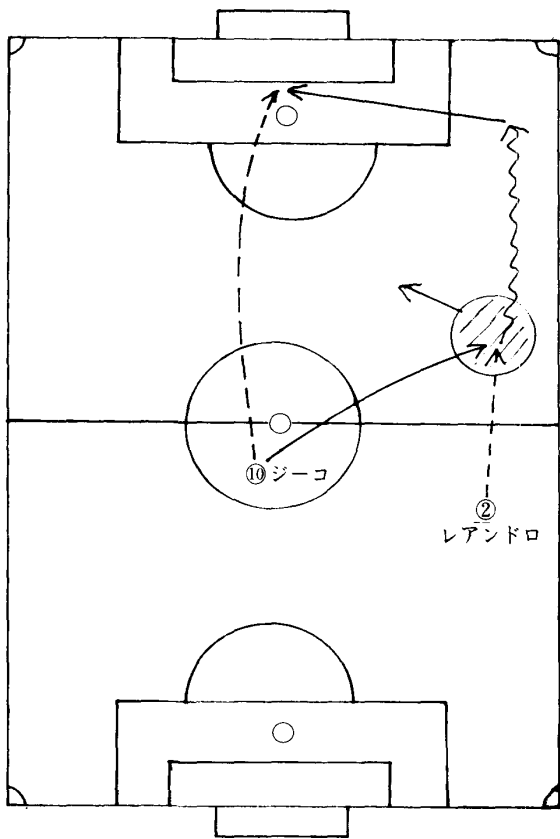


図 3 センターリングブラジル②レアンドロ

FWが作ったスペースを使ったオーバーラップである。②レアンドロは作ってくれたスペースへ走り込んでドリブルからセンターリング。この形は両サイドバックの典型的なものである。

(ブラジル対アルゼンチン)

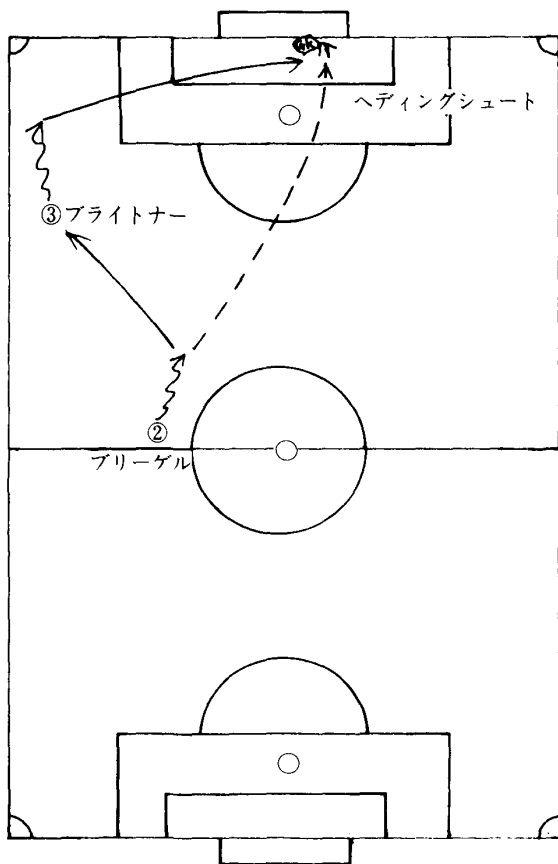
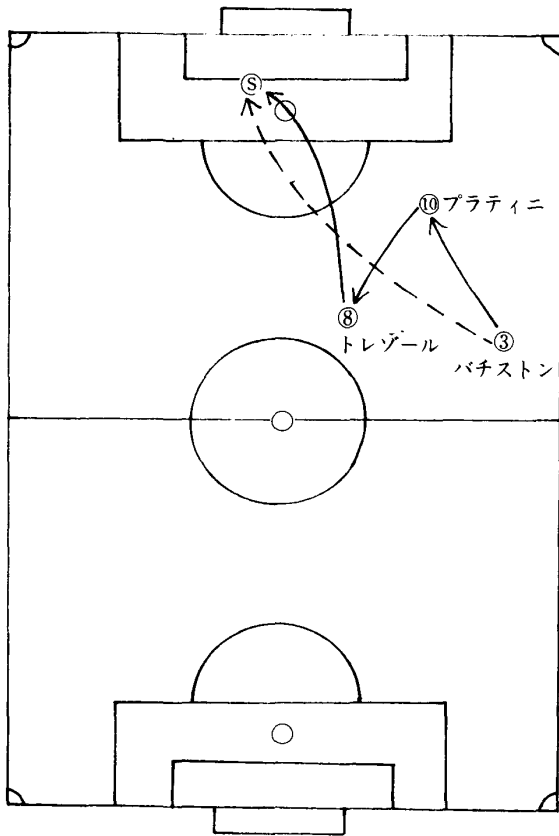


図 4 決定的な形 西ドイツ②ブリューゲル

決定チャンス、②ブリューゲルは中盤から③ブライトナーにパスをしたあと敵陣のゴール前まで長い距離を走り、センターリングに頭で合せた。このブリューゲルのような思い切ったオーバーラップが得点を生むことが多い。

(西ドイツ対オーストリア)

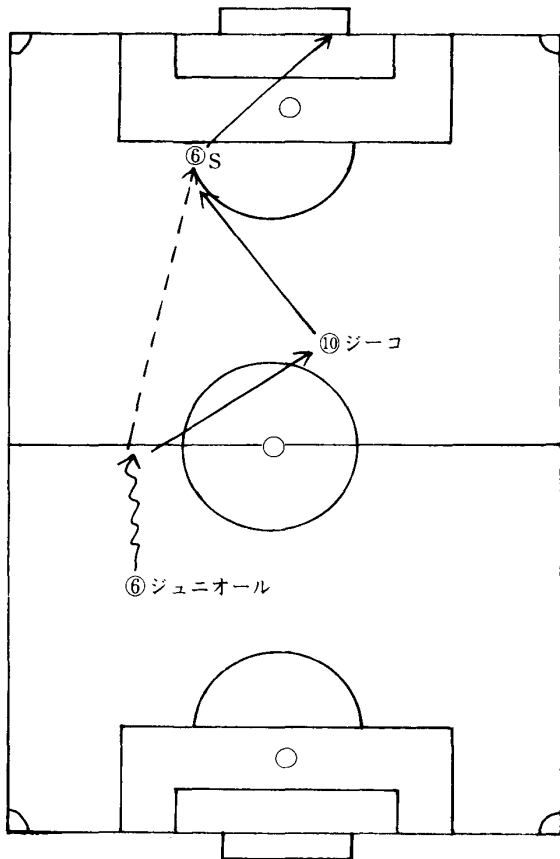




オーバーラップしてシュート，③パチストンから⑩のプラティニにパスをだしパチストンはそのままオーバーラップをしてゴール前に走る，プラティニが⑧のトレゼールにパスそれをスピードによって上ってきたパチストンにタイミングのよいパスをしシュート，ゆっくりしたポストプレーから急に崩しのパスをだして決定的なチャンスを作った。

(フランス対イングランド)

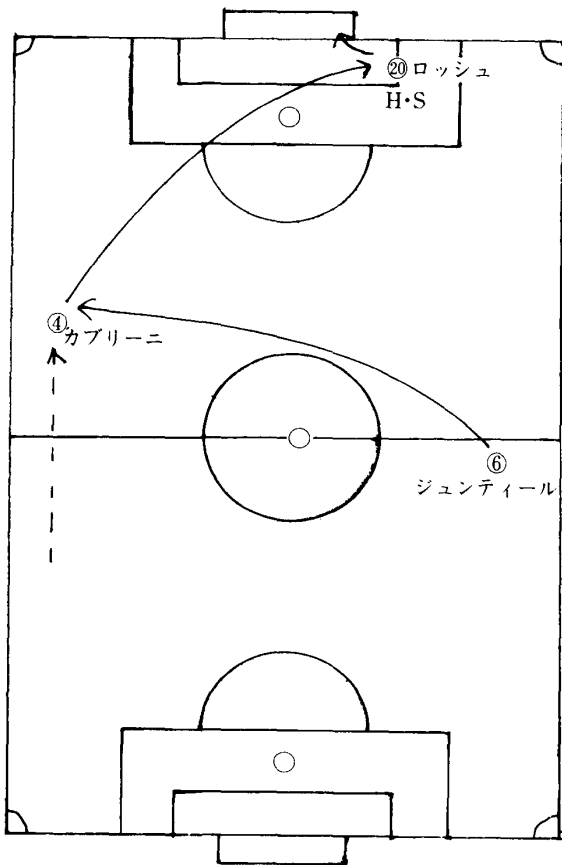
図 5 シュート フランス③パチストン



オーバーラップからの得点である。⑥ジュニオールがドリブルで上がり⑩のジーコにパスをしてから長い距離を走りジーコから絶妙のパスがでてそのままゴールイン。

(ブラジル対アルゼンチン)

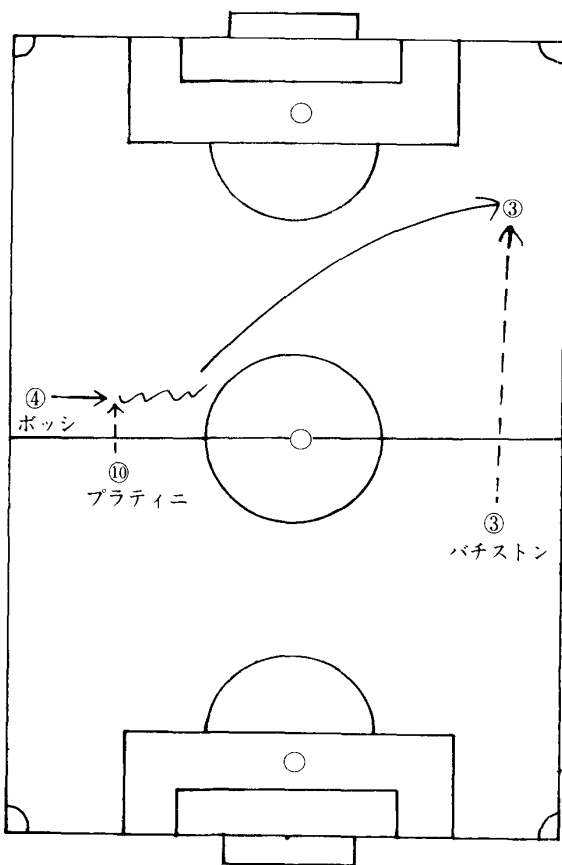
図 6-I 得点 ブラジル⑥ジュニオール



オーバーラップからの得点アシスト。⑥ジュンティールからサイドチェンジのパスが④カブリーニを通り、敵がゾーンデヘスに入る前にここから早いタイミングのクロスボールを入れ⑳ロッシュがヘディングシュート、ゴールイン。

(イタリア対ブラジル)

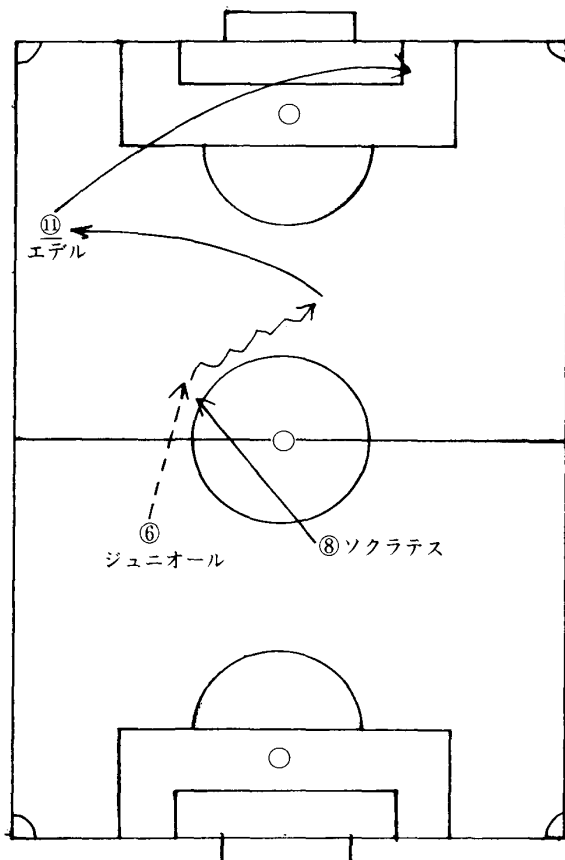
図 6-II 得点 イタリア④カブリーニ



サイドチェンジからのオーバーラップ、⑩プラティニのすばやく大きなサイドチェンジパス右タッチバック③パチストーンがオープンスペースにはしりこみ左右のゆさぶりによるオープン攻撃が成功した。

(フランス対イングランド)

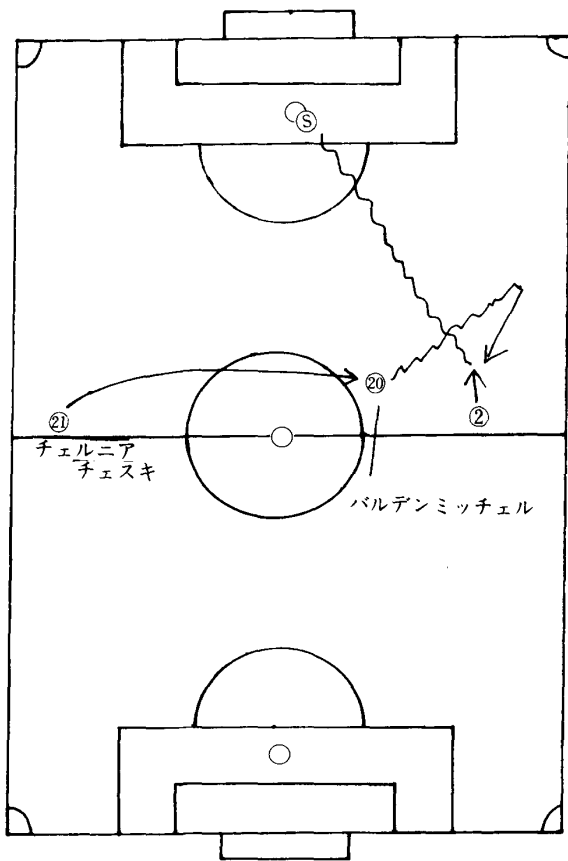
図 7 サイドチェンジからのオーバーラップフランス③パチストーン



つなぎに入ったオーバーラップ。中盤でのボールキープの状態で後ろから押しこまれてきたフリーの⑥ジュニオールが⑧ソクラテスからパスをもらいドリブルで突破を計ろうとしてリバースのプレーから⑪エデルにパスしセンターリング。

(ブラジル対ソ連)

図 8 つなぎに入ったオーバーラップブラジル⑥ジュニオール



ドリブルのオーバーラップである。②ゲルツは⑳チェルニアチェンスキから㉑バルデンミッチェルにサイドチェンジしたときに、ハーフラインまで押し上げていて㉑にパスをもらいリターンパスをするふりをしてリバースのプレーしときに前にスペースができスピードに乗ったドリブルで突破そしてシュートをねらう、この思い切ったドリブルが敵のバックスは驚異である。

バックスがオーバーラップしようとしたときには必ず使ってやるのが大切である、なぜならば逆襲をされることが多いからである。

(ベルギー対アルゼンチン)

図 9 ドリブルのオーバーラップベルギー②ゲルツ

## 結 果

### オーバーラップするには

1. スペースがなくてはならない。(オープンスペースと味方が動いて作ったスペース)
2. 長い距離を走る。
3. タイミング。(ボールをもらうタイミングとオーバーラップするタイミング。)
4. パスをだす選手の戦術眼。
5. 個人能力, 技術, 戦術眼が必要である。
6. オールラウンドにプレーできる選手。

しかし、バックがオーバーラップした時にパスがカットされたり、ミスがおこった場合に逆襲をされる恐れがある。BK陣のFW化により、攻撃に失敗した時や、中盤でボールをカットされた時には相手の攻撃に対し、守備陣型に混乱をきたすことが多い。この欠点を補ない尚かつ、より堅固な守備体型とフリーなプレーヤを作り出すBK陣のオーバーラップを、円滑に、かつ攻撃的に活用できるシステムがWリベロシステムである。

### Wリベロシステムの戦術分析

#### 攻撃と守備の戦術

#### I. 守備の戦術

プレーヤーの布陣は図—10なり、RB—ST, LB—STのそれぞれの間にはRリベロ, Lリベロが位置する。これにより、グラウンドの右半分はRリベロがカバーし左半分はLリベロがカバーすることになる。現在までスリーバックの後方を全てカバーしてきたスイパーよりもスルーパスやドリブルに対して迅速かつ容易にカバーリングをすることができる。

この結果STサイドバックは背後のスルーパスやロビングに対して、多くの注意を払うことなしに、敵フォワードに対し厳しいチェックやより攻撃的な守備をすることができる。中盤に生じたフリーな敵プレーヤーに対しても、左右どちらかのリベロがマークに当たり、他方のリベロは今までのスイパーの位置にポジションを修正する。これにより守備陣型は崩れず、安定した守備ができる。図—11は今までのシステムでスイパーがHBのマークにあたった時である。図—12と比較すればよく理解できるであろう。

RBあるいはLBのオーバーラップ後の守備に関しては両サイドのリベロがウィングのマークにあたり他のリベロがスイパーの位置に移る。図—13がこれである。

ゴール前で多用される壁パスに対しスイパーシステムに於てはカバーリングが非常に難しい

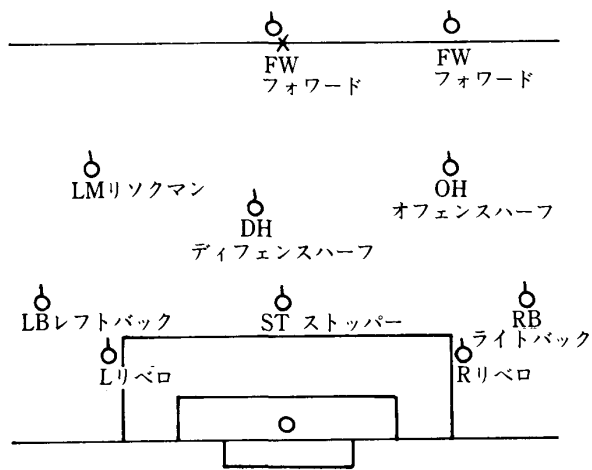


図-10

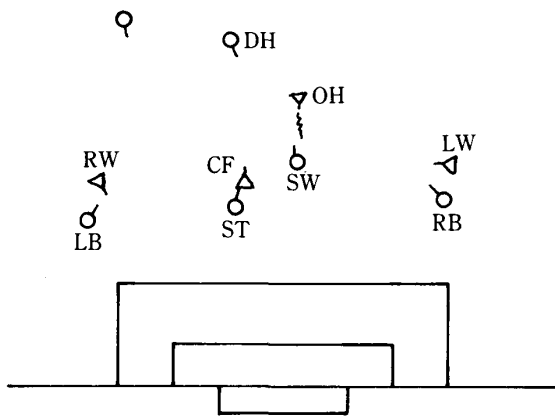
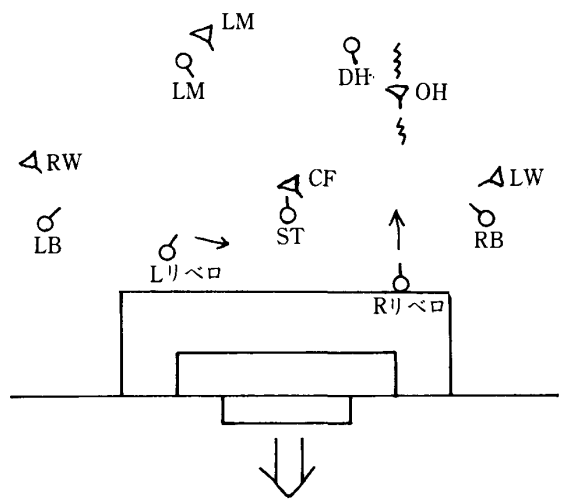


図-11

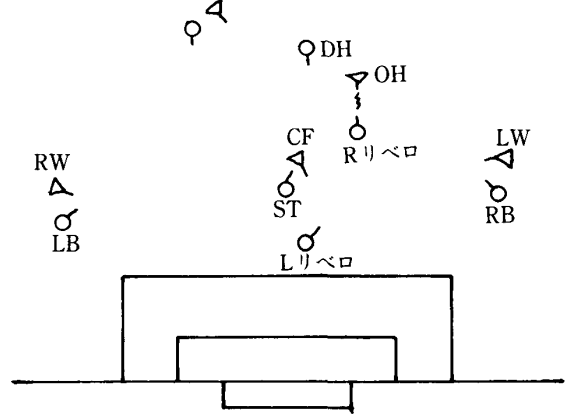


図-12

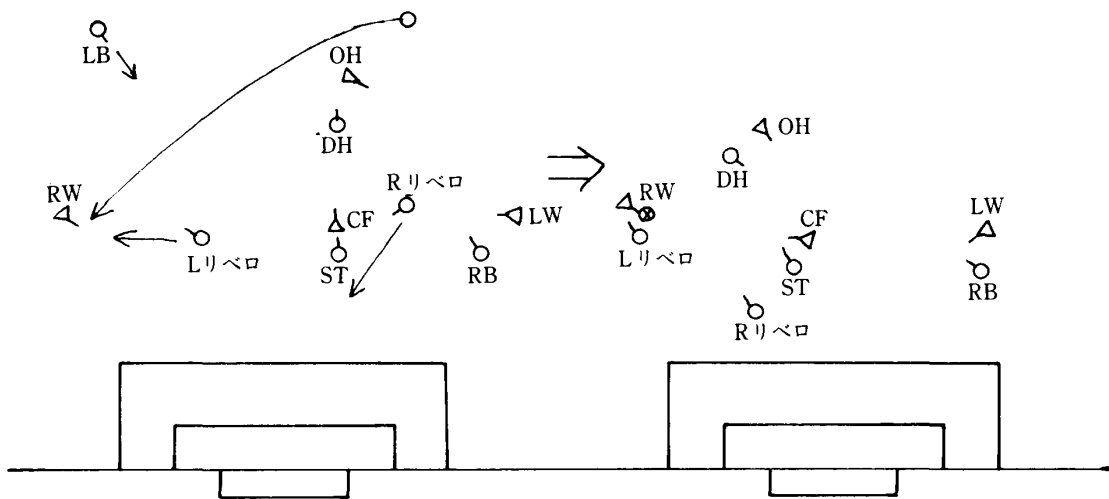


図-13

面があったが、Wリベロにより、左右どちらのカバーリングをも可能にする。単純な二人の壁パス (図-14) に対しては一人のスィーパーで処理できるが、一步進んだ三人目のプレーヤーが加わった壁パス (図-15) に対してはWリベロが非常に有効である。

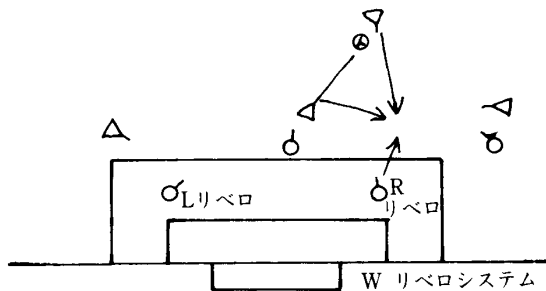
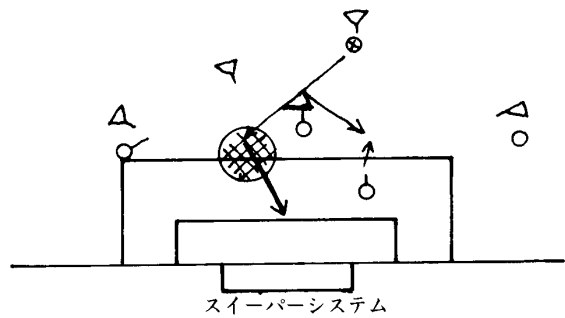
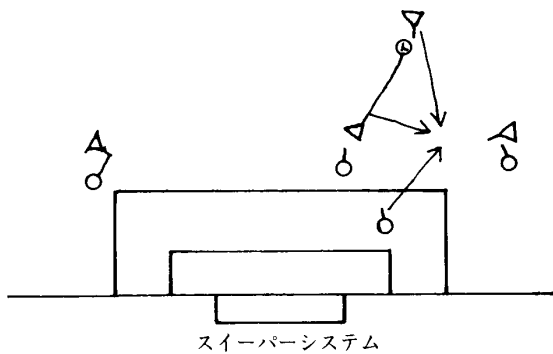


図-14

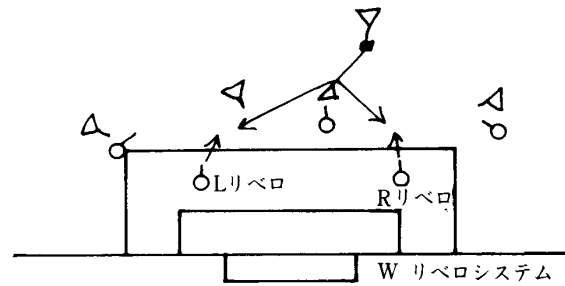


図-15

## II. 攻撃の戦術

Wリベロシステムでの攻撃は1対1の攻防よりもスペースとマークのづれを最大限に利用し、ボールを受けてからの戦術でなく、ボールを受ける前に、いかにフリーな状態になれるかを考えたチーム戦術である。前線のプレーヤーは常にマークされていることが多く、そのマークを振り切りフリーになることは個人戦術に秀れ敵よりも技術が上の時にのみ可能になる。しかし、後方にいるプレーヤーが前方に進んだ時に比較的マークが甘くなり、ボールを受けた時は、すでに相手よりも優位な状態になる事が多い。これを最大限に利用しようとするのがWリベロシステムの攻撃に於ける戦術の最大の目標である。

### (1) 両サイドバックの攻撃

攻撃はゴールキーパーからと言われる様に相手ボールをゴールキーパーがとった時に敵ディフェンスよりも、どの位早くオフense (殊にBK陣) に切り換えられるかが、良い攻撃ができるかの大部分を占めている。この時、もっともボールをもらい易いのは両サイドに位置しているプレーヤー (両サイドバック及び両ウィング) である。この時、後の守備の事を考えるとなかなか攻撃に移ることは難しいが、Wリベロのカバーリングが常にあるという状況により、思い切っ

た攻撃に出られる。図-16がこれである。

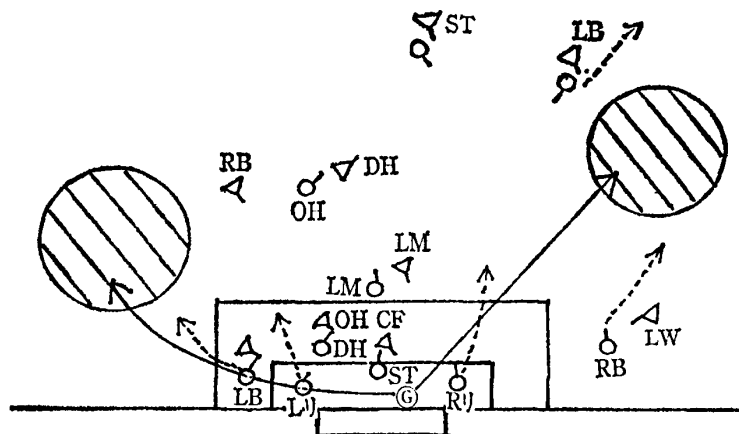


図-16

また、中盤に於てミッドフィールダーがボールをキープしている時、フォワードのポジションチェンジによりできたスペースへフルバックがオーバーラップする攻撃も効果的で、今までよりも容易にできる。

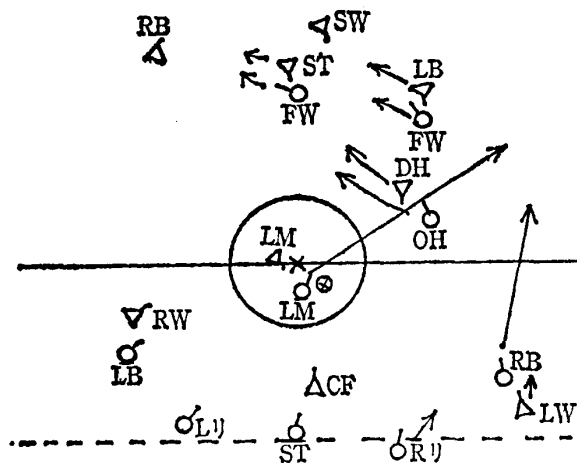


図-17

## (2) リベロの攻撃

リベロはそのポジションの性質上、フリーにプレーする事が多く、比較的良い位置でボールを受けられる事が多い。また、相手のパスコースを読み易くパスカットをしてドリブルに移る機会も多い。これらのプレーは相手チームにとってはマークのしにくい状態に陥入り易く、守備体型を崩す結果になる。(図-18)

また、リベロの攻撃へのサポートも、もう一人のリベロがいるということで容易になるし厚い攻撃ができる重要なプレーの一つである。このプレーはミッドフィールダーがよりゴール前への詰めを厳しく行なえ、リベロがミッドフィールダーの役目をするようになる。図-19はリベロのサポートである。

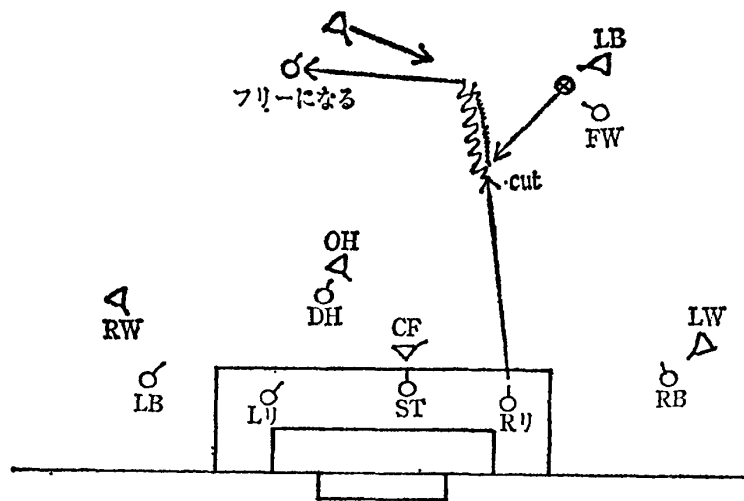


図-18

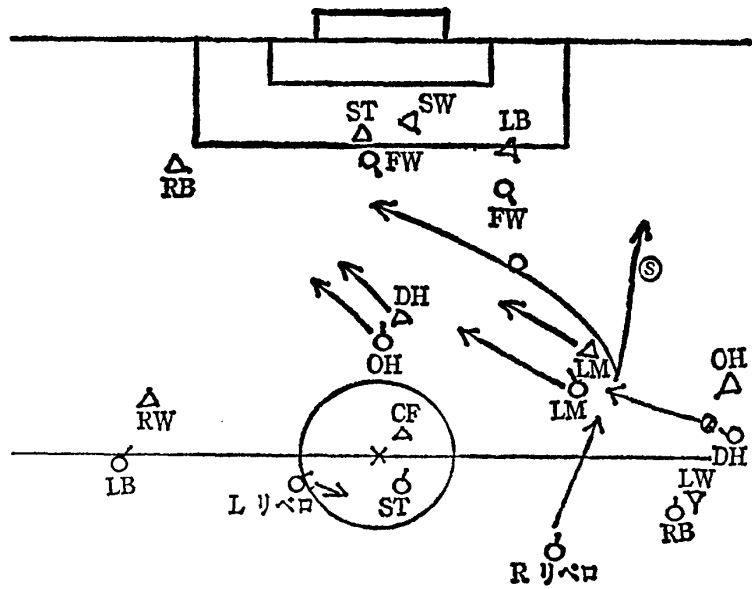


図-19

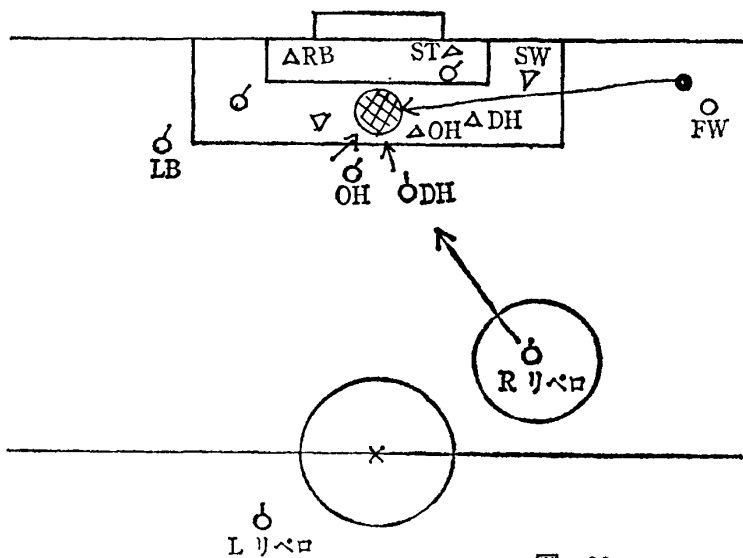


図-20

ゴール前へ走り込みMFが第二のFWになる、またLB、Rリベロが攻撃参加をする。



①と②のコースへ走ることもし、パスすることもし。

### (3) ミッドフィールダー (MF) のフォワード (FW) 化

スイーパーシステムと比較してFWが一人少なく攻撃力が落ちることは予想されるが、これをうめるのがフルバックのオーバーラップやリベロの攻撃参加であり、MFのFW化である。即ち守備の強化により、今までのシステムでは思いきってできなかったゴール前の詰めを可能にする。前線にできたオープンスペースの走り込みは、マークの厳しいFWよりもマークしづらい第のFWとなるであろう。

MFのウィングプレーも重要な戦術の一つである。FWのポジションチェンジできたスペースへMFが走り込みボールを受ける。この時大切なことはスペースへの走り込みながらボールを受けることで、もしスペースに入ってからボールを受け様とするならば、マークをする時間を敵に与えることになり、今までのウィングプレーと変らないことになる。

図-21は、FWがスペース作る動きである。LBはFWをマークしているのでFWの動きについていく。このスペースにFWが走りこんでウィングのプレーをする。

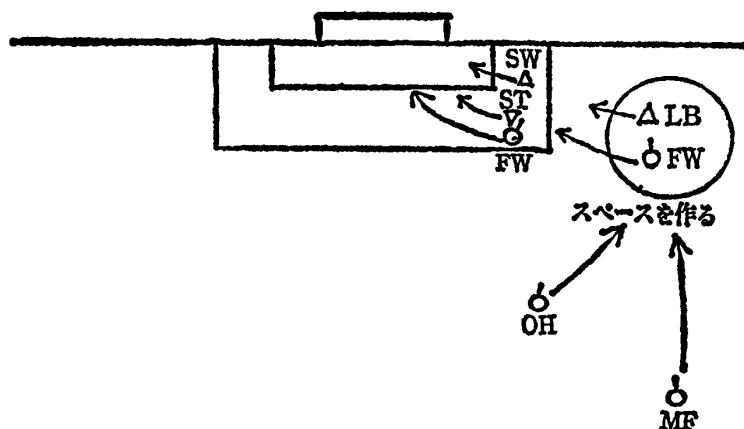


図-21

### (4) フォワード (FW) の攻撃

このシステムでのFWは今までの仕事に加えMFやバック (BK) の活用できるスペースを作る動きを沢山しなければならない。この時FWは実際にボールをもらうつもりで動かなくては相手マークがその動きについてこなくなる。また、この動きは常にフリーになっている相手の方向に移動すべきである。

この動きにより敵BK(b)は役立たないBKとなり、オーバーラップしたRBないしはMFに対するマークの為にストッパーないしスイーパーがマークの修正を強いられる。この時FW(a)はより自由なゴールへの動きができる。

図-22, 23がこれである。

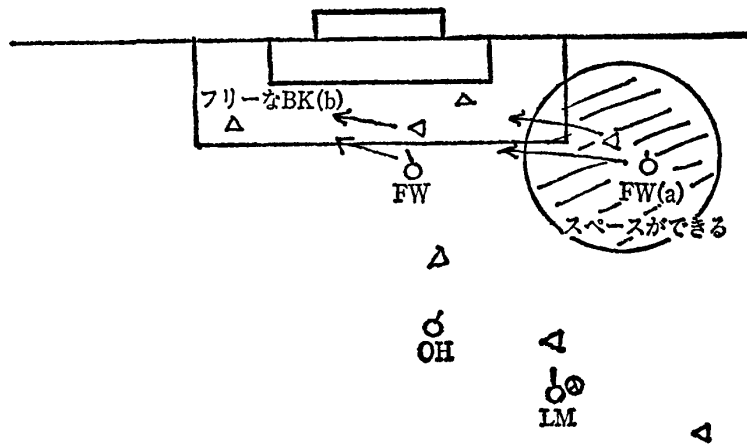


図-22

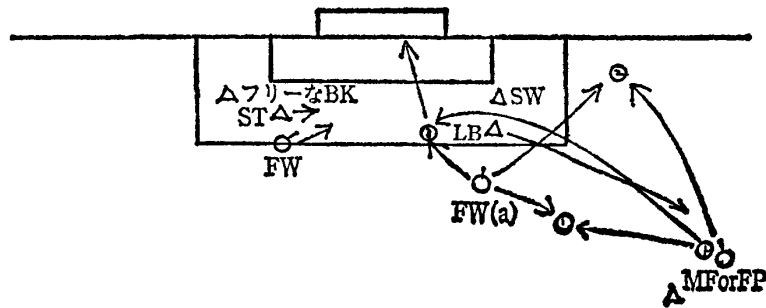


図-23

## ま と め

総じてこのシステムの攻撃は数的優位な守備から切り変えの早さと思いついたバックス、ハーフバックスのオープンスペースの走り込みにより敵にマークのづれを生じさせる戦術である。個人技の劣勢を走力とボールを受けた時点の優位差で補ないゴールに結びつけるものである。これからのサッカーはスピードとスペースをいかにうまく使って攻撃をするかであろう。個々の技術能力及る作戦能力が向上することによって、流動的なサッカー、ポジションを固定化させない、オールラウンドプレイヤーが要求されることも必然であろう。

## 参 考 文 献

1. チャナディのサッカー (上, 下) アルパドチャナディ著, (ベースボールマガジン社 1967. 4.10)
2. サッカー世界のプレー 牛木素吉郎構成 (講談社 1970. 9. 20)
3. サッカー戦術とチームワーク チャールズ・F・C・ヒューズ著 (ベースボールマガジン社 1974. 8. 31)

4. スポーツの科学的研究レビューシリーズ1 サッカー 浅見俊雄著 (新体育社 1981. 2. 25)
5. 世界サッカー史 オルドジッフ・ジュルマン著 (ベースボールマガジン社 1977. 4. 10)
6. 旺文社スポーツ・シリーズ サッカー 竹腰重丸著 (旺文社1956)
7. サッカー・ベスト・コーチ A・ウェード著 (ベースボールマガジン社 1973. 8. 15)
8. コーチ学 (コンビネーションサッカー編) 山中邦夫著 (趙遙書院 1980. 6. 3)